SHOW-HEY シネマルーム

★★★★★

キューポラのある街

1962 年／日本映画
配給：日活／100 分

2024（令和 6）年 11 月 30 日鑑賞　シネ・ヌーヴォ

Data　2024−80

監督・脚本：浦山桐郎
原作：早船ちよ
脚本：今村昌平
出演：吉永小百合／浜田光夫／東野英治郎／杉山徳子／市川好郎／小沢昭一／吉行和子／殿山泰司／加藤武

みどころ

シネ・ヌーヴォが「銀幕デビュー65 周年　吉永小百合映画祭」の初日に『キューポラのある街』をラインナップしたのは当然だが、浦山桐郎監督のデビュー作たる本作がなぜ第 13 回ブルーリボン賞の作品賞を獲り、吉永小百合が史上最年少の 17 歳で主演女優賞を受賞したの？

昭和の名曲の 1 つである『昭和枯れすすき』（74 年）は「貧しさに負けた」と歌ったが、本作は全く逆。あの貧しさ、あの劣悪な社会的、家庭的環境の中、中学 3 年生の石黒ジュンは、なぜ、あんなに前向きにかつひたむきに生きることができたの？全日制がダメなら定時制があるさ！そんな消極的選択も立派だが、ジュンはそうではないから、さらに偉い！

2024 年の今、経済的にも豊かになり、モノも情報もあふれかえっているが、10 代の若者は“しらけ世代”“Z 世代”そして“スマホを持ったサル”と呼ばれている上、小遣い欲しさの“闇バイト”まで横行中。それに比べると、貧しくても夢と希望があった 1960 年代の若者の生き方を、本作のような名作を鑑賞する中で改めて考えたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■「吉永小百合映画祭」を開催！こりゃ必見！■□■

大阪市西区の九条にある“こだわりの映画館”シネ・ヌーヴォは、さまざまな企画をしてくれるからうれしい。古くは 2004 年 6／19～7／30 に開催された「中国・映画の全貌 2004」で、私は 2 万円のフリーパス券を購入し、合計 31 本を鑑賞した。それから早くも 20 年が経ったが、あの時の興奮を私は昨日のように覚えている。そんなシネ・ヌーヴォが 2024 年 11／30～12／20、「銀幕デビュー65 周年記念　吉永小百合映画祭」を開催し、合計 22 本を下記の日程で上映することに。

銀幕デビュー65周年記念 吉永小百合映画祭

11/30(土)	12:50 キューポラのある街	14:50 ガラスの中の少女
12/1(日)	12:50 草を刈る娘	14:40 赤い雷と白い花
2(月)	12:50 赤い雷と白い花	14:30 キューポラのある街
3(火)	12:50 ガラスの中の少女	14:15 草を刈る娘
4(水)	12:50 キューポラのある街	14:50 赤い雷と白い花
5(木)	12:50 草を刈る娘	14:40 ガラスの中の少女
6(金)	12:50 赤い雷と白い花	14:30 キューポラのある街
7(土)	10:00 キューポラのある街	12:00 あすの花嫁
8(日)	10:00 若い人	11:50 いつでも夢を
9(月)	10:30 あすの花嫁	12:10 ガラスの中の少女
10(火)	10:00 草を刈る娘	11:50 若い人
11(水)	10:00 いつでも夢を	11:50 あすの花嫁
12(木)	10:00 若い人	11:50 いつでも夢を
13(金)	10:00 あすの花嫁	11:40 若い人
12/14(土)	10:40 帰郷	12:45 愛と死をみつめて
15(日)	9:50 愛と死をみつめて	12:10 あゝひめゆりの塔
16(月)	10:00 あゝひめゆりの塔	12:55 いつでも夢を
17(火)	10:00 愛と死をみつめて	12:40 あゝひめゆりの塔
18(水)	10:00 あゝひめゆりの塔	12:30 帰郷
19(木)	10:00 帰郷	12:20 あゝひめゆりの塔
20(金)	10:40 愛と死をみつめて	13:05 帰郷

チラシに載る女優・吉永小百合の経歴は下記の通りだ。私は2024年3月末をもって弁護士生活50周年になったが、それと対比しても“銀幕デビュー65周年”はすごい。

吉永小百合 略歴

1945年、東京都渋谷区生まれ。小学6年生の時にラジオドラマ『赤胴鈴之助』に出演。1959年に『朝を呼ぶ口笛』で映画デビュー。1960年、日活に入社直後に『ガラスの中の少女』で主演、脚光を浴びる。浜田光夫とのコンビで1960年代の日本映画界に一大旋風を巻き起こす。青春映画スターとなった吉永のファンは『サユリスト』と呼ばれ社会現象となった。1962年の『キューポラのある街』で第13回ブルーリボン賞主演女優賞ほか多数受賞、同年、主演映画『赤い雷と白い雷』の主題歌『寒い朝』でレコードデビュー、翌年『いつでも夢を』でも同名の主題歌で橋幸夫とのデュエット曲は300万枚の大ヒットを記録した。1965年、早稲田大学に入学、1969年次席で卒業。1968年、日活専属契約が終了するまでの9年間で76作品に出演した。以降も浦山桐郎、市川崑、山本薩夫、深作欣二、山田洋次と名だたる監督作品に出演。女優活動の他に『愛と詩の記録』(1966年)への出演と、ドラマ『夢千夜日記』(1981年)、映画『夢千代日記』(1985年)で原爆症に苦しむ主人公を演じたことをきっかけに反戦・反核運動にも力を入れる。2014年、自らプロデュースした『ふしぎな岬の物語』ではモントリオール世界映画祭で審査員特別賞グランプリ&エキュメニカル審査員賞をW受賞。2023年の映画『こんにちは、母さん』(山田洋次監督)では『第66回ブルーリボン賞』主演女優賞を受賞。現在もトップ女優として活躍を続けている。

私は2008年10/31～11/27に放映された「スカパー！」の『祭りTV！吉永小百合祭り』に出演した。これは、吉永小百合主演の 113 作目の記念作品『まぼろしの邪馬台国』(08年)(『シネマ21』74頁)が2008年11／1に公開されるのを記念して企画されたものだった。そんな企画になぜ私が浜田光夫と並んで出演することができたの？それは一にも二に

も、私が熱狂的な“サユリスト”だったからだ。

他方、中学3年生の時から3本立て55円の映画館に一人で通って観ていた吉永小百合主演映画を、75歳の今、どんな感性で受け止めることができるのだろうか。そんな不安もあったが、何はともあれ、当然のように初日のオープニング作品とされている『キューポラのある街』（62年）を改めて鑑賞することに。

■□■浦山桐郎監督のデビュー作！16歳（高２）で出演！■□■

吉永小百合のデビュー作は1959年の『朝を呼ぶ口笛』だが、日活で主演デビューしたのは翌1960年の『ガラスの中の少女』だ。他方、『キューポラのある街』は、日活の助監督だった浦山桐郎の監督昇格デビュー作。Wikipediaによると、浦山が1960年4月に単行本化されたばかりの早船ちよの原作に注目し、今村昌平とともに完成させた脚本を見た日活は、「吉永を主演に使うのなら」という条件で、浦山の初監督作品として撮影を許可したそうだ。1961年12／24にクランクインした同作の撮影当時、吉永小百合は16歳（高2）だった。そして、1962年4／8に公開された同作は第13回ブルーリボン賞作品賞等の他、吉永小百合は史上最年少の17歳で主演女優賞を受賞し、吉永小百合も浦山桐郎もその後大きく飛躍するきっかけになった。

私は1962年4月に同作が公開された当時13歳（中1）だから、映画館でそれを観ることはなかったし、中学3年生から3本立て55円の日活映画と洋画系の2つの映画館に通い始めてからも、同作を観ることはなかった。大学時代になってからは何度もTVやビデオで観ているが、スクリーンで本作を観るのは今回が初めてだから期待感でいっぱいだ。他方、キューポラって一体ナニ？舞台となった埼玉県の川口市は一体どこにあるの？北朝鮮への帰還事業って一体ナニ？中学時代に分かっていなかったそんなさまざまな事実や社会的背景は、今では十分にわかっている。しかし、そんなことがわかっているから、映画を観るのに適しているわけではない。むしろ、中学時代には当然備えていたはずの感性が、75歳の今、失われてしまっているのではないか、という心配の方が大きかった。

「吉永小百合映画祭」のオープン初日の『キューポラのある街』の上映だから、劇場は超満員？そんな心配をして事前に確認したが、予想に反して実際はガラガラ。若いカップルも1組だけいたが、その他は老人ばかり。高校生や大学生はどこにもいなかった。それは当然といえば当然だが、若干さびしい感じも。もっとも、すぐ近くに座っていた1人の老人客がちょっとしたシーンになるとやたら声を出して笑いまくるのにはうんざりさせられたが、私の感性は昔以上に研ぎ澄まされているようだ。そのため、ジュンが精神的にとことん追い込められているシーンでは思わず涙。そして逆境の中、定時制高校への進学の道を発見したジュンが、念願の復職がかなったことで、家族の幸せが見えてきた父親から「カネは出すから埼玉県立第一高校に進学しろ。」と言われても、「いや、私は自分の選択として定時制高校の道を選ぶのよ。昼間に働くことも勉強なのよ。」と明るく前向きに語る姿を見て、また涙、涙・・・。

■□■浜田光夫と市川好郎の演技力にびっくり！■□■

私は2024年のNHK大河ドラマの『光る君へ』で藤原道長役を演じている柄本佑が若い時に出演した映画を観てその演技力にびっくり。彼の弟の柄本時生の演技力も、妻の安藤サクラの演技力もお見事なら、安藤サクラの姉・安藤桃子の映画監督としての活躍もお見事だ。そんな芸達者で、超個性的な“一族”に比べると、今ドキの日本の若い俳優は美男美女ばかりで、何の個性も感じないタイプが多いが、その点、個性派俳優のトップクラス（？）を走る柄本佑や柄本時生、安藤サクラらは例外中の例外だった。

そんな私の目には、1962年公開の本作にみる浜田光夫の演技力（の確かさ）にビックリ。本作の大ヒットを受けて、吉永×浜田の純愛コンビ（ゴールデンコンビ）は、それまでの石原裕次郎、小林旭のアクション路線とは別の「日活のドル箱路線」に成長していくが、若き日の浜田光夫の演技力の確かさにビックリ。

さらに、演技力の確かさでは、石黒ジュンの弟・タカユキ役を演じた俳優・市川好郎にもビックリ。ジュンとタカユキの父親役を演じた東野英治郎の演技達者ぶりは当然だが、あの貧乏家族の中で、ダチのサンキチらとともに独自の生きザマを見せるたくましい少年像を市川好郎が熱演しているので、それにも注目！

■□■60年代の貧しさに注目！ジュンの前向きの生き方に注目■□■

今回の「吉永小百合映画祭」のキャッチフレーズは、「生活は厳しくても、夢と希望があった1960年代。そこには吉永小百合の映画があったー。」とされている。まさにその通り。中高一貫男ばかりの進学校に入学し、中学3年生の時から一人で映画館に通い始めた私はまさにその時代を共に生きてきた人間だ。それから約60年、今や75歳になった私がそれと対比して、現在のキャッチフレーズを記せば、さしずめ次の通りになる。すなわち、

> 生活は豊かになり、モノと情報にあふれかえっているが、“ケータイを持ったサル”が闊歩し、無関心と無感動そして将来への失望と絶望感に苛まれている2020年代の今、テレビではアホバカ・バラエティと半分インチキで誇大演出されたお笑いコマーシャルばかりがタレ流され、金を払って映画館に行ってもテレビ番組の延長のような誰にでもわかる、誰でも納得できる映画ばかりが量産されている今、観るべき映画は一体どこに・・・？

右の写真を見れば、「生活は厳しくても、夢と希望があった1960年代。そこには吉永小百合の映画があったー。」のキャッチフレーズがいかに正鵠を得ているかが、二人のこの表情だけで十分わかるはずだ。

2024（令和6）年12月5日記